

## 第2話 関が原の戦い

あいづ うえすぎかげかつ せいぼつ いえやす みつなり  
会津の上杉景勝を征伐するために、家康が関東に下ると、三成は好機会として  
た つみ な あ  
起って、家康の罪を鳴らし、西国の諸大名と共に兵を挙げるが、  
しゅうじん く く すこぶ  
衆心区々（皆まちまちで）、頗る不統一でしたので、関が原の一戦に破れる。

### 家康の専恣（もっぱらほしいままにすること）

まえだとしいえ いしだ みつなり ちつきよ いえやす はなは  
前田利家の死と石田三成の蟄居が同時に起こってからは、家康のわがままは更に一層甚だしくなっ  
た。前に中止すると言った縁談を進めて結納を取り交わしたのみならず、秀頼が成人するまでは、新た  
に知行を与えたり加増したりしないことになっていたにもかかわらず、堀尾、細川、森の諸氏が、彼のた  
めにつくしたのに対して知行を増やしてやったりした。

しかし更に、まえだ もうり うき た うえすぎ ひと  
しかし更に、前田、毛利、宇喜多、上杉らの諸大老をもことごとく帰国させて、自分独りで政治をほ  
しいままにするのに都合よくした上に、ついで大阪城に入って、きたのまんどころ きよじょう  
北政所のいた西の丸を自分の居城と  
し、ついに伏見城と共にここをも其の手に収めたのです。

### 大阪城の家康

こうして、としいえ  
こうして、利家の死後1年も経たないうちに、家康は大阪城にいて、ちょうど秀吉が部下の諸大名に  
のぞ  
臨んだと同じように、諸大名の参賀を受けて、諸大名の人質を取め、前田氏にも頭を下げさせるに至った。  
しかし、これらは皆、秀頼の後見としてやった事ですから、名分の上では秀頼との君臣関係は少しも変わ  
っていないのです。すでに天下の実権を握って、内心うづうづしている家康が、どうしてこれにいつま  
でも満足しておられよう？ 彼はいかにもして、天下を徳川氏のものにしようとした。しかし、ろうかい  
彼は、自分から進んで豊臣氏の天下を奪ったとは世間から言われたいようにしたいと思った。

### 家康の真意

しかし、それにはどうすればよいか？ 最も良い方法は、だれかに秀頼を擁して兵を起こさせて、こ  
れをうち破って、徳川氏の武威を示し、自然と天下の人心を徳川に帰させることです。しかもこれには、  
うかが うかが いしだ みつなり あつら む  
かねてから機会を窺っている石田三成という誂え向きの人物がいます。けれども、彼もまた中々の  
くせもの ゆだん い  
曲者ですから、決して油断は出来ない。これに対しては十分の用意が要る。

それにはま こんきよち  
それには先づ、自分も根拠地の関東に帰って、大いに兵備を整えると共に、なるべくならば、自分に  
好意を有す諸大名に兵を率いて来たり属させておいて、そして、この間に、三成の1派に秀頼を擁して兵  
を挙げさせれば、自分に属して来ている諸大名の力を以って三成の1派と戦うことが出来る。これが最  
も良い策なのだが、しかしそれには、先づ東国の方面で、誰かに兵を起こさせる必要がある。そうすれ  
ばこれを討つ事を名として、諸大名を率いて下ることが出来るからです。家康は内心ひそかにそう考え  
ていました。

## 第2話 関が原の戦い

ところに、たまたま起こって来たのが上杉景勝の問題です。

### 上杉景勝の武備

これより先、景勝は、慶長3年3月に、封を越後から会津に移されたが、入国後間もなく秀吉が薨じた知らせを受けて上京したので、翌4年の8月に帰国すると、専ら新しい領内の経営につとめた。即ち領内の諸城を修理すると共に、本城の若松城を取り上げ、会津から四方に出る道を修繕し、橋を架けたりしたのみならず、さかんに武器や糧食を買い入れ、また、しきりに浪人も召抱えた。

これは、新たに2倍余の大きな領地を得た景勝としては、いつまた戦乱が起こらないといえない当時における極めて当然な処置を講じたに過ぎなかったのですが、事あれかしと待ち構えていた家康は、この事を聞くと、忽ちこれを利用せずにはおこななかった。彼はこれを機会に、すぐにも出兵しようと、景勝が謀反を企てている趣を毛利輝元、宇喜多秀家および奉行らに告げた。

けれども、彼等は、軽々しく兵を動かすよりは、先づ使いをやって、景勝の真意をたずねべきであるといったので、家康は、自分の家臣と奉行増田長盛の家臣とを遣わし、他に、承兌という坊さんからその友である上杉景勝の老臣直江兼続に書面を送って、景勝に、二心なければ誓書を出すように速やかに上京して世間の疑いを解くようにと言わせた。

### 家康の緊迫と景勝の反発

これに対して、景勝は、兼続をして一々反駁させて、家康の圧迫を堂々と撥ね返したが、その言葉は実に痛快を極めていた。例えば、景勝が謀反の噂があるというのについては、京都と伏見との間でさえ、とかくの噂は止む時が無いくらいであるから、況して遠国といい、景勝は若輩と来ているので、立ちそうな噂であるが気にかけるほどのことでもないし、ご安心なさるがよろしい、と言った。

又、上京の延引については、去々年に国替となり、程なく上京して、去年9月に帰国したばかりなのに、当年正月時分に上京していたのでは、いつの間に領内の政治を取り決める事ができますか、と逆襲した。更にまた誓書については、去々年以来の数通の起請文が反古になる上は、重ねては必要の無い筈と言いつつ切っている。

のみならず、景勝には幼少の秀頼公に叛く心など毛頭ないのに、何者かの讒言をそのまま信じて、その者の糾明さえしない家康の態度を非難し、景勝が上京しないのもその責任は家康にあるとまで極言した。

### 家康の独笑い

この痛快な、しかし家康からいえば、頗る無礼な、不遜極まる回答を得て、家康は却って喜んだ。彼の思う壺に景勝がハマったからです。即ち、こうまで明らかに敵対行動をみせられれば、これを口実に征伐することが出来る。

家康はすぐに諸将に出発の用意を命じ、自分でこれを率いて会津に向うことにした。

奉行らは驚いて、家康がこの際、自分で征伐などに出かけては、世間で秀頼を見放すようにも思おう

## 第2話 関が原の戦い

からといって出征を諫め、「第一、謀反かどうか明らかでないし、よしまだ謀反が事実であるとしても、だれか他の大名を2,3人も差し向ければ、それで十分ではありませんか」といって、これを遮り止めようとしたが、もとより家康がこれを容れよう筈が無かった。彼が伏見城の千畳敷で、1人にこにこ笑って立っていたと伝えられるのもこの頃の事で、いよいよ多年の望みを達すべき時機の来たのを喜んだために外ならない。

### 家康の景勝征伐

こうして家康は、陸奥の伊達政宗、出羽の最上義光、越後の堀秀治、加賀の前田利長らを、四方から会津に向かわせ、自分は、鳥居元忠を伏見城の留守に留めて、慶長5年6月18日に伏見を出発した。

この時、彼と共に征途に上った秀吉恩顧の諸将は、福島正則、浅野幸長、黒田長政、池田輝政、細川忠興、加藤嘉明、藤堂高虎、山内一豊らの外、まだ中々に多かったが、三成もまたその子の重家を大谷吉隆に付けて従軍させたいと申し出た。家康はそれには及ばぬといひ、これを聴き届けなかったが、彼等がいかに互にとぼけ合って、どこまでも相手を謀ろうとしていたかが分かる話です。

### 遊山気分の家康

さて家康は、諸将と共に東海道を下ったが、道々諸城主の饗応を受けたりしながら、殆ど遊山気分で、わざと日数の重なるようにと、遊猟を試みたり、あるいは名所を見物したり、江戸近くになってからも、鎌倉や(神奈川の)金沢で悠々と日を暮らしたりして、7月2日にやっと江戸城に入った。のみならず、江戸でもぐづぐづして、7日に漸く軍令を頒ち、19日に秀忠を先発隊として出動させ、自分は21日に下野の小山に着いた。実に20日も長く江戸に留まっていたのです。これを見ても、彼の目的が、諸将を関東に連れ下って、その間に三成に兵を挙げさせることに在って、景勝を討つというのはたゞその口実に過ぎなかった事がわかります。

### 佐和山城の石田三成

一方、三成は、佐和山に蟄居させられてからも、ひそかに家康を除く手段を講じ、城の修理をしたり、あるいは兵糧を集めたり、あるいは浪人を召抱えたりして、家康に詰問されたこともあったが、それには何かと口実を見つけて、巧みに弁解して、うわべはどこまでも反抗心などは無いように見せていた。のみならず、家康が景勝を征伐することとなると、前にも述べたように、その子の重家を従軍させたいと申し出たりした。

### 石田三成の挙兵

しかし、家康が軍を率いて東下するや否や、忽ち起って、今こそ多年の計画を実現する機会が来たと、先づ大谷吉隆が家康の軍に従おうとして越前から出て来たのを佐和山城に迎えて、これを打ち明けた。吉隆はもと三成の推挙に依って秀吉に仕えたので、2人は古い親しい親友でした。彼は三成の計画の不成功を信じて、しきりに諫め止めてみたが、三成の心はすでに固く決して、動こうともしなかったので、

## 第2話 関が原の戦い

ついによんどころなく同意した。そこで、三成は大阪に出て、増田長盛、長束正家らを説き、更に彼等と共に毛利輝元および宇喜多秀家を説いて同意させていよいよ7月7日に、家康が誓詞に背いた罪状13ヶ条を、奉行の名を以って天下に告げると共に、「太閤のご恩を忘れぬ人々は、この際、家康を撃って秀頼公に忠義を尽くされたい」という意味の事を諸国の大名に書き送った。

### 西軍の勢力

こうして、石田方となったのは、大阪に集まったものに、前に挙げた人々の外、島津義弘、吉川広家、小早川秀秋、長曾我部盛親、安国寺恵瓊、鍋島勝茂、小西行長、生駒親正、立花宗茂らがあり、東国に上杉景勝、佐竹義宣、信濃に、真田昌幸、北国に大谷吉隆、脇坂安治らがあり、九州にも大友義統らがあった。両軍の衝突地となるべき尾張、美濃の方面では、岐阜の織田秀信、大垣の伊藤盛正らを始め、美濃の諸将は多くこれに応じて、尾張でも、犬山の石川貞清が身方となった。すなわち、大体において木曾川以西は石田方となったのです。それでこれを西軍といい、これに対して家康方を東軍と呼んでいる。

加藤清正は、この時、領地の熊本に帰っていたが、以前から三成を憎んでいた関係もあって、家康に身方した。

### 西軍の盟主と人質

さて大阪では、表面は主将として秀頼を奉じていたが、なにしろ8才の少年ですから、これを輔けて全体の指揮をするようにと、諸将の評議で毛利輝元を盟主と定めて、家康のいた大阪城の西の丸に入らせた。

そして着々と行動を起こしたが、先づ第一に家康に従って東下した諸将をも身方にしようとの考えから、大阪にいるその妻子らを城中に入れて、人質とすることにした。

ところが、最初に迎え入れようとした細川忠興の夫人が、「既に夫が家康に従って東下したからには、死んでも石田の命令には従わない」と、邸に火を放って自害したために、三成は大いに驚き、他の家族にも自殺されては、それこそ却って藪蛇になろうから、それきり城内に移すことは止めて、ただ諸将の邸に番兵を置いてこれを監視することにした。

### 細川忠興の妻

ついでにいうと、忠興の夫人は明智光秀の娘です。才徳共にすぐれた美人でした。本能寺の変があったので、忠興の怒りに触れて、一時別居させられたが、つつしんで婦人の道を守って、あくまでも貞節をつくっていたので、秀吉が聞いて憐れに思い、忠興を諭して再び迎えさせたのでした。

早くからキリスト教の信者となって、教名をガラシャといった。この最後の時にも、彼女は自害とはいっても、その教義によって自刃はせずに、家臣に撃たせて死んだということです。年は38才でした。

こうして、人質の計画はうまく行かなかったが、すでに諸国の軍勢は続々と大阪に集まって来ていたので、三成らはここに軍議を定め、先づ近畿地方の家康方を一掃してから、道を分けて東に進み、はるかには会津の景勝と東西相応じて家康を挟撃することにした。



ほそかわただおき つま  
細川忠興の妻

たなべじょう ほそかわゆうさい  
田辺城の細川幽斉

そこで、第一に先づ、伏見城および忠興の父のほそかわゆうさい細川幽斉（ふじたか藤孝）が守っていた丹後のたんご田辺城（今の舞鶴）を攻め取ることにして兵を向けた。

## 第2話 関が原の戦い

ところが、田辺城は、<sup>おのぎきみさと</sup>小野木公郷が 15,000 の兵を以って攻め囲んだにもかかわらず、藤孝が雑兵とも僅かに 500 人で籠りながら、実によく戦って、50 日になっても落ちなかった。1 つは攻囲軍の諸将の多くに戦意が無くて空砲を放った者さえいたためですが、1 つは言うまでもなく藤孝が名将だったのです。

彼は文武の両道に通じていたが、とりわけ和歌の名人でして、そのころ秘伝として最も尊重されていた古今伝授を伝えた唯一の人でしたので、後陽成天皇には、もし藤孝が戦死でもしたら、この秘伝が絶えてしまうと思われて、わざわざ勅使を丹後にお下しになり、包囲軍には囲みを解かせ、藤孝には開城して難を免れるようにと諭しになった。それでついに 9 月 12 日に開城したが、これは、ちょうど関が原の戦いの 3 日前でしたので、石田方は少なくとも 10,000 余りの兵をこのために関が原の本戦に用いることが出来なかったわけです。

### 伏見城の鳥居元忠

また、伏見城には<sup>うきただひでえ</sup>宇喜多秀家、<sup>しまづよしひろ</sup>島津義弘、<sup>こばやかわひであき</sup>小早川秀秋、<sup>もうりひでもと</sup>毛利秀元、<sup>きっかわひろい</sup>吉川広家、<sup>ちょうそかべもりちか</sup>長曾我部盛親、<sup>なべしま</sup>鍋島勝茂、<sup>かつしげ</sup>小西行長らが 40,000 余りの大軍を以って攻め寄せたが、<sup>とりにもとただ</sup>ここを留守していた鳥居元忠は、初めから今日のあることを予期していたので、少しも驚かなかった。彼は家康が 10 才で今川家に人質になった時から従っていた老臣で、年は家康より 2 つ上で、この時はもう 62 才の老人でした。

今度ここを留守にすることとなった時に、家康が「人数が少なくてご苦労だが・・・」と言うと、<sup>もとただ</sup>元忠は、「いや、わたくしは左様には思いません。京大阪が只今の通りに<sup>せいひつ</sup>静謐ならば、当城はわたくしと、<sup>ご</sup>五左衛門（<sup>さえもん</sup>松平近正）との 2 人でも十分に守れます。もし又、<sup>そうどう</sup>騒動が起こって、敵が大軍で攻め囲むようになりまして、<sup>こんごく</sup>近国に後詰めする身方はなく、とても防戦は出来ません。いづれに致せ、多くの人数をここに残しておく必要はありません」と言ったという。彼はこの時からすでに<sup>ろうじょう</sup>籠城、討ち死にを覚悟していたのです。

さればこそ、家康が出発の前夜、主従が親しく昔からの思い出ばなしに、思わず夏の<sup>みじかよ</sup>短夜を更かしたあとで、<sup>もとただ</sup>元忠が家康の前をさがろうとして、歩行が不自由なので、小姓に手を引かれて行くのを、ちっと家康は見送りながら、しきりに<sup>らくるい</sup>落涙したというし、また、その翌朝、家康がいよいよ出発の時に、<sup>もとただ</sup>元忠らは大手の外まで見送ったが、何やら名残惜しさに思わず涙に咽んだとも言われている。60 年近くを共に戦乱の中に生きて来た主人と、これが今生の別れかと思うと、<sup>もとただ</sup>さぞ元忠も哀しかったろうし、また、その老臣を犠牲としなければならない家康の心のうちも、さすがに<sup>つら</sup>辛かったことでしょう、

### 決死の籠城軍と無統制の包囲軍

伏見城の攻撃は 7 月 18 日に始まったが、城は秀吉の築いた天下の名城であり、守将は決死の<sup>もとただ</sup>忠臣元忠ですので、ここもまた容易には落ちそうもなかった。この時、かねてから心を家康に寄せていた<sup>こばやかわひで</sup>小早川秀秋は、密かに書面を元忠に送って、自分も城中に籠って共に<sup>よせて</sup>寄手を防ごう、と申し込んだ。これは、かつて三成の<sup>ざんげん</sup>讒言によって秀吉の怒りに触れ、危うく国替えさせられようとした折に、家康の同情のある計らいで、これを<sup>まぬが</sup>免れたのを恩としていたためです。

## 第2話 関が原の戦い

もとただ  
元忠はこれに対して、「そのお心があるならば、今、ここに籠城して、討ち死になどなさるよりは、そのうち家康公が上って来られて、東軍と西軍が決戦する時に、西軍をお撃ち下さい。ご内意のほどは関東に申し上げておきます」と言って、この旨を家康に申し送ったといわれる。ひであき 秀秋もまた使いを江戸に下して、くろだながまさ 黒田長政の手を経て、ないおう 家康に内応することを約束したが、この頃 きっかわひろいえ ながまさ 吉川広家も長政によって内応を申し込んだということです。

### 伏見城の陥落

こういう風に、包囲軍は兵数こそ多かったが、まぢまち 人心は区々で一致していなかった。だからこそ、城兵は僅かに 1,800 余りにしか過ぎなかったが、けんご 堅固にこれを守って、よく 10 余日も持ちこたえたのです。ところが、いざ籠城をなった時に、急に入城して一緒に籠もることになった近江の甲賀者が 4,50 人いたが、その者らが、7月29日の夜半に、ないつう 寄手に内通して、火を城中に放ったので、ついにもとただ 元忠以下城兵はことごとく戦死して、翌8月朔日に初めて落城した。しかも、包囲軍の死傷もまた 3,000 にのぼったのです。

### 西軍の進出

初め、西軍はただ一気にこの伏見城を攻略して、美濃、尾張に軍を進めようとしたが、容易にこの城が落ちなかったので、その行動の上に少なくとも十数日の遅れを来たすに至った。けれども、今や漸く心を置くところが近畿方面に無くなったので、いよいよ主力を美濃および伊勢の方面に向けた。

もうりひでもと ながつかさまさいえ きっかわひろいえ ちょうそかべもりちか あんこくじえけい  
毛利秀元、長束正家、吉川広家、長曾我部盛親、安国寺恵瓊らは 30,000 余りの兵を率いて伊勢路に向かい、あ の つ 阿濃津城（今の津市）の とみたのぶたか 富田信高を攻めて、8 月末にこれを おとしい 陥れた。美濃路へは、石田三成が自ら諸将と共に兵を率いて向い、しまづよしひろ こにしゆきなが 島津義弘、小西行長らと大いに軍儀を凝らし、更に諸方の兵を集めて、伊勢路の友軍と相応じて尾張に進もうとした。

### 小山の家康

さて一方、家康は、7月24日、しもつけ おやま 下野の小山に着いた晩に、もとただ 伏見の元忠からの使者が着いて、初めて三成の挙兵の確報に接した。けれども、もとより予期したことであるし、というよりは、むし 寧ろそれを目的として東下したのですから、少しも驚かなかった。その翌25日に彼は諸将を自分の本陣に召集めて、い なおまさ ほん だただかつ 伊直政、本多忠勝の二人をして言させた。「昨夜、伏見からの ちゅうしん 注進によると、石田三成らが秀頼公を奉じて、家康征伐の兵を挙げたとの事である。おのおの方には、いづれも妻女を大阪に置いてある事であるから、どうぞご随意に当地を引き払って、お上りになって構いません。又、この後自然、石田らに一味されようとも、家康は少しも遺恨には思いません」と。

諸将はがくぜん 愕然としてまだ一言も出さない時に、ふくしままさのり 福島正則が 1 人進み出て、

「いかにも家康公の仰せの通り、われわれの妻子は大阪においてありますが、かかる時節に臨み、妻子に心を惹かれて武士の道を踏み違えてはなりません。思うに、秀頼公はまだご幼少のことで、何事もご承知のある筈が無い。全く石田が野心の悪巧みでありましょう。余人は知らず、正則においては、

## 第2話 関が原の戦い

家康公が、太閤の遺言通りに、秀頼公を立てられる限り、身命を放なげうってお身方いたします」

と言ったので、他の諸将も皆これに同意した。

### 東軍の西上

そこで家康は、結城秀康ゆうきひでやす（家康の子で、秀忠の腹違いの兄）を宇都宮に留めて、蒲生秀行がもうひでゆきらと共に上杉景勝うえすぎかげかつに備えさせ、秀忠を中山道から西に進ませて、自分は東海道を進むことにしたが、ここでまた、ちょっと注意しておくべき事がある。それは、家康が福島正則ふくしままさのり、池田輝政いけだてるまさを先鋒せんぽうとして、秀吉恩顧の諸将、即ち客将きやくしょうらをことごとく先に出発させておきながら、自分は8月7日に江戸城に帰って、そのまま容易には出陣しなかったことです。

先発の各将らは、8月14日には早くも正則の本城である尾張きよすの清洲城に入って、岐阜、犬山の西軍と対しながら、



ふくしままさのり  
福島正則

家康の命を待っていた。ところが家康はどこまでも大事を取って、8月13日にやっとただ使いを江戸から清洲かぜに出して、風邪のために出発が遅れたことを諸将に告げさせたただけでした。彼は内心なおひそかに諸将の向背こうはいを懸念けねんしていたのです。

そこで、諸将は自分らが進んで西軍と戦うまでは、家康が江戸城を出発しないことを知って、いよいよ木曾川を渡って岐阜城に迫ることにした。岐阜さえ攻め落とせば、犬山は攻めずとも落城するに決まっていたからです。

### 岐阜城の陥落

岐阜城の城主織田秀信おだひでのぶ（幼名三法師さんぼうし）は、祖父信長以来の城郭によって、三成の援兵と共に奮戦したが、衆寡敵せず、ついに降参して出て、城は2日目に陥落した。時に8月23日でした。東軍の1隊は更に進んで、長良川の合渡堤ながらがわにごうどづつみ来た三成の援兵を破って不破郡ふわぐんの赤坂あかさかに達した。この地は、三成らが本拠としていた大垣城のすぐ近くです。

### 西軍の守勢

それで、西軍は守勢しゅせいに転じなければならなかったもので、全力を大垣附近に集中して、東軍を防ぐことにした。折柄おりがら、伊勢いせに向っていた宇喜多秀家うきただひでいえも大垣城に会し、大谷吉隆おたによしたからの北国の兵も、毛利秀元もうりひでもと、長束正家ながつか、吉川広家よしかわひろいえらの伊勢の諸勢も、近江にいた小早川秀秋こばやかわひであきも、共に来て関が原附近に陣を取った。しかし、其の上にもと、三成は使いを大阪に送って、輝元てるもとの出陣を促うながしたが、たまたま増田長盛ますだながもりが家康に内通するとの噂が大阪城内に立ったために、輝元は出陣をぐずぐずしていた。

一方、家康は岐阜城が落ちたとの知らせを受けて大いに喜び、にわかついたちに9月朔日を以って江戸城を出



## 第2話 関が原の戦い

発した。 11日に清洲に着き、その日とその翌12日とは、多分、中山道なかせんどうから来る秀忠の軍が到着すべき頃だと思って待ったのでしょう。 病気しょうと称してここに滞在して、13日に岐阜に至り、14日に赤坂に進んだ。

家康はすでに小早川こばやかわ、吉川きっかわの内応の話に大いに勢いを得ていたので、敵軍を大垣城から引き出して、得意の野戦で一挙にこれを撃滅げきめつしようと、わざと、「この敵とは決戦せず、少しの兵を留めてこれに備え、本軍はまっすぐに大阪に向かおう」と諸將に告げさせて、前進を始めた。

大垣城の西軍はこれを見て驚いた。 秀家ひでいえ、三成みつなり、正家まさいえ、吉隆よししたか、義弘よしひろ、行長ゆきなが、盛親もりちか、その他の諸將は急に軍議を開いて、その夜、即ち9月14日の夜半から、降りしきる秋雨を冒して、ひそかに関が原せきがはらに退いた。 そこに陣を取っている他の諸隊と共に、家康が西上の道を要して、東軍と一大決戦をしようというのです。 しかし、これがすでに家康の計略にかかったのであることは、前に述べた彼の擬勢ぎせいで明らかです。

### 関が原の地

関が原せきがはらは美濃せきがはら（岐阜県）の西端に位置して、昔、不破ふわの関を置かれた地です。 北と南とは伊吹山いぶきやまと南宮山なんぐうやまとで取り囲まれて、東西に狭い平原をつくっている。 中山道はここで2つに分かれて、本道は西南近江に走り、1つは北国街道となって西北近江を経て越前に通じている。 のみならず、更に牧田路まきたちは南方の伊勢にも通じています。 まことに交通の上からも、将又、軍事の上からも稀に見る要衝はたまたまです。



岐阜県の西端 関が原の古戦場（南方を写す）  
正面に黒く見えるのが松尾山の連山で、その中央部の山上が叛応軍の小早川秀秋が陣した処。

### 関が原の西軍

西軍は、今、この要衝やくじんしを扼して陣を布いた。 石田三成しまかつたけは謀臣島勝猛らと共に北国街道の北に陣し、島津義弘しまづよしひろはその南に陣した。 これに続いて小西行長こにしゆきなが、宇喜多秀家うきたひでいえは、相並んで天満山の麓てんまやまに陣し、大谷吉隆おおたよししたかは脇坂安治わきさかやすはる、朽木元綱くちきもとつな、小川佑忠おがわすけただ、赤座直保あかさなおやすらと共に中山道はさを挟んで陣した。 小早川秀秋こばやかわひであきは

## 第2話 関が原の戦い

その南方の松尾山に、<sup>まつおやま</sup>吉川広家、<sup>きつかわひろいえ</sup>毛利秀元、<sup>もうりひでもと</sup>長束正家、<sup>ながつかまさいえ</sup>安国寺恵瓊、<sup>あんこくじえい</sup>長曾我部盛親らは遥か東方の南宮山の東部に陣した。そして、三成はその夜の雨の中を、ただ一騎で、<sup>きつかわ</sup>吉川、<sup>ながつか</sup>長束、<sup>あんこくじ</sup>安国寺、<sup>こぼやかかわ</sup>小早川らの諸陣地を馳せめぐり、南宮、松尾の両山の兵は、本軍の合図を待って、山を降って敵の腹背を衝くようにと手筈を定めた。

### 東軍の前進

一方、東軍は、<sup>ふくしままさのり</sup>福島正則、<sup>くろだながまさ</sup>黒田長政を先鋒として、夜半から前進を始めたが、間もなく西軍が挙って関が原に出た知らせを受けると、家康はすぐに全軍に進撃を命じて、<sup>ほりおただうち</sup>堀尾忠氏、<sup>なかむらただかず</sup>中村忠一、<sup>あさのよしなが</sup>浅野幸長、<sup>いけだ</sup>池田輝政、<sup>やまのうちかずとよ</sup>山内一豊らを一垣城、南宮山の敵に備えさせ、自分は旗本の兵を以って関が原に向かい、南宮山の西北端の桃配山に本陣を布いた。

東軍は約 75,000、西軍は約 80,000、<sup>もくしょう</sup>今や目睫（まつげ）の間に<sup>たいじ</sup>対峙して、<sup>いわゆる</sup>所謂天下分け目の<sup>だいかっせん</sup>大合戦をすることとなったのです。

明けて慶長 5 年 9 月 15 日、前夜からの雨は明け方になって歇んだが、濃霧が深くあたりを閉ざして何一つ形の見えるものは無かった。

### 開戦

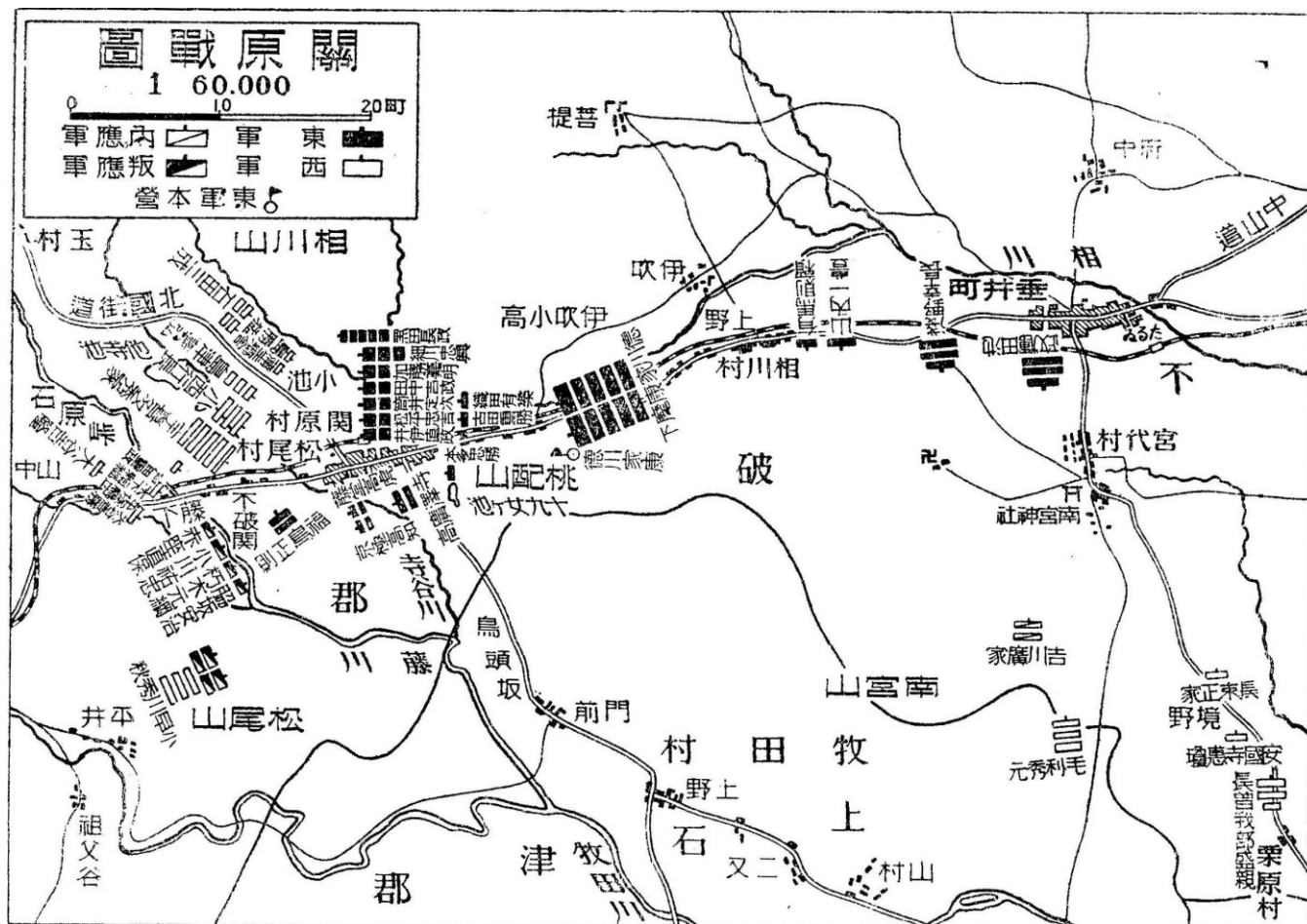
午前 8 時ごろ、その朝霧の中で、<sup>まつひらただよし</sup>松平忠吉、<sup>い い なおまさ</sup>井伊直政らが<sup>う き た ひでいえ</sup>宇喜多秀家の軍に鉄砲を打ちかけたのが始めで、<sup>ふくしままさのり</sup>ついで<sup>ひでいえ</sup>福島正則も秀家の軍に迫った。

三成の軍には<sup>くろだながまさ</sup>黒田長政、<sup>ほそかわただおき</sup>細川忠興、<sup>かとうよしあき</sup>加藤嘉明らが競って進み、<sup>きそ</sup>小西行長の軍には<sup>こにしゆきなが</sup>寺沢広高らが<sup>てらさわひろたか</sup>迫って行った。



向かって右端に近く丸く二つ起伏しているのが北天満山と南天満山。西軍はその前面にかけて一列に陣して、東軍はこれに対して図の前面から平地を進んで行った。家康の本陣のあった桃配山は図の最左端に当たる。

<sup>ほんただだかつ</sup>本多忠勝もまた中央を突進して<sup>ゆきなが</sup>行長、<sup>ひでいえ</sup>秀家の軍を突破しようとした。<sup>おおたによしたか</sup>大谷吉隆は初めから死を決していたので、病気で不自由な身を<sup>かご</sup>駕籠に乗って、その中から部下を指揮して、<sup>とうどうたか</sup>藤堂高虎、<sup>きょうごくたかとも</sup>京極高知らの進撃を撃退した。



両軍ともに一進一退、激戦すでに数時にわたって、霧も今はすっかり晴れていた。時分はよしと、三成は合図の烽火をあげて、松尾、南宮両山の身方に出勤を促したが、いづれも動こうとする様子がない。三成、吉隆、行長らは更に急使を松尾山に走らせて、小早川秀秋に応戦を迫ったが、これにも彼は応じない。又、南宮山では長東正家、安国寺惠瓊らがしきりに先手の吉川広家に開戦を迫ったが、これもまた言を左右に託して応じない。すでに述べておいたように、広家、秀秋は東軍に内応する約束を結んでいたからです。

### 小早川秀秋の叛応

一方、家康は、すでに南宮山に戦意のないのを認め、陣地を関が原村近くに進めて諸隊を指揮していたが、正午ごろになっても勝敗が不明で、叛応すべき筈の秀秋もまだ動かないのを見ると、ついにこらえかねて、試みに鉄砲を秀秋の陣に向けて打ちかけさせた。覚悟を決めさせるためです。そこで秀秋もついに叛応の令を下して、山を降って吉隆の陣に攻めかけた。

家康はこれを見ると、全軍に関の聲を挙げさせて、更に急に進撃させた。

けれども、吉隆は初めから秀秋の二心を察していたので、少しも驚かずに、すぐに備えを立て直して、迎え撃ってこれを却けた。しかし秀秋の側面を撃たせようとした脇坂、朽木、小川、赤座の四将が東軍に忠じて、却って吉隆の陣に向かい、藤堂、京極の敵軍と共に三方から攻めて来たために、さすがの吉隆もついに敗れて自殺した。

## 第2話 関が原の戦い

### 西軍の全敗

西軍の一角がここに崩れると共に、謀反人がいるとの叫びが伝わるや否や、忽ち西軍は氣落ちして、行長の軍が先づ潰え、秀家の軍もついで敗れた。三成の軍は黒田、細川らの諸将と激戦をつづけ、更に勝ち誇った藤堂、京極らの攻撃を右側から受るようになってからも、死守して屈せず、追いつ追われつすること七八度に及んだが、次第に重臣どもも死傷したところに、小西、宇喜多の両軍が潰走したのを見て、ついに敗れた。

三成、行長、秀家らは皆逃げた。

ただ、島津義弘の1隊だけは、雲霞の如くに殺到して来た敵兵の中を切り抜けて牧田路に逃れて、多くの死傷者を出すには出したが、義弘は養老郡の多良から近江に出て、無事に薩摩に帰った。

又、南宮山の長束正家、安国寺恵瓊、長曾我部盛親らは、先手の吉川広家に開戦を迫っている間に、早くも本軍の敗戦に接したので、ついに1戦も交えずして、それぞれ伊勢、近江の方面に引き退いた。

こうして、戦いは午後2時過ぎに終わって、東軍の全勝に帰したが、それにしても、参加した兵数だけで言えば、西軍は37,000で、2倍の東軍及び約20,000の裏切り者と対戦して、よく6時間の長きにわたって勝敗を決せさせなかったのです。むしろ驚嘆すべきです。わけても、石田、大谷、宇喜多、島津の諸隊の勇戦は、特記すべきであったといわれています。

### 家康の用意

さて家康は、関が原の戦いには完全に勝利を得たが、西軍の諸将のうちで討ち死にした大谷吉隆の外は、その行方が不明であるし、大阪城にはなお総大将の輝元が奉行の増田長盛と共に秀頼を擁しているで、まだ容易には安心が出来なかった。そこで先づ小早川秀秋、田中吉政、井伊直政らの諸隊に三成の本城である佐和山城を攻めさせて、17日にそれを落とすと、大阪を指して軍を進めた。19日に草津に着き、ここで、さきに中山道に向った秀忠が関が原の戦いに遅れて来たのと会って、その翌20日に大津に進んだ。

これより先、秀忠は40,000に近い軍勢を率いて、宇都宮から引き返すと中山道を進んだのだが、途中で、信濃の上田の城主真田昌幸が西軍にに応じて、その子の幸村と共に籠城していたのと出会ったので、これを攻降そうとして空しく数日を暮らしているうち、家康からの書面でその西上を知って、それからは大急ぎに急いだ、ついに戦いには間に合わなかったのです。

家康は大津に数日滞在して、ここでうまく大阪のほうの始末をつけようとした。彼は先づ使いを秀頼母子に送って、秀頼は幼少だし、淀君は婦人のことであるから、勿論、今度の事件には何の関係もある筈が無い。家康においても、2人に対しては少しも疑う心は持たないから安心なように、と言わせた。一面からいえば、関が原の敗戦を聞いて以来、どうなる事かとびくびくしていた淀君以下の者らを親切に安心させたのですが、又、一面からいえば、これを懐柔して、輝元らが奉ずるところとならないよ

## 第2話 関が原の戦い

うにしたのです。 というのは、もし輝元が秀頼を奉じて大阪城に籠ったならば三成をこそ憎んで家康のために関が原に戦った諸将も、故太閤の恩顧を思って、矛を逆さまにして家康にかかって来るかも知れなかったからです。

それで、一方、家康は吉川広家らをして頻りに輝元を説いて大阪城を退かせようとした。 輝元は関が原に出陣させた養子の秀元が、先手の広家のために妨げられて、ついに1戦もせずに引き上げて来たのと一緒にいたが、井伊直政、本多忠勝の起請文を見、福島正則、黒田長政から家康の誠意を伝える書面を得た上、更に池田輝政、浅野幸長、藤堂高虎および長政、正則の連署で、輝元に対して家康公にも十分にご諒解があると、たしかに保証した誓詞を受け取ったので、ここに初めて家康の他意なきを信じて、ついに9月24日、大阪城の西の丸を去って、木津の別荘に入った。

25日に増田長盛も城を退去した。

そこで家康は、26日に大津を立て、その夜は淀に泊まり、27日に大阪城に入った。 そして大いに戦後の処分をすることにした。

( 第2話 関が原の戦い 終わり、 次は前頁に戻り、第3話 江戸幕府の創立へ )